

## 編集後記

「国文学雑誌」九十三号をお届けする。

今回は、漆崎正人教授のこれまで続けておられるキリシタン資料にみる語彙研究を巻頭に、水口幹記准教授と田中良明氏（大東文化大学東洋研究所講師）の意義深い翻刻・校注を掲載、また「小特集」として関谷博、揚妻祐樹教授両人による幸田露伴をめぐる論考を組み合わせることができた。この小特集は、あらかじめ企画したというよりは近代文学研究者で露伴を専門とする関谷氏と近代日本語の成立を研究課題としてとりこんでいる国語学の揚妻氏が話しているうちに偶発的に立ち上がったもので、そういうありかたは歓迎すべきものであり、楽しんでいただけたらと思う。最後の中村円香さんは、二〇一四年度の卒業生で、卒業論文をもとに再構成したものである。北海道、道南・南茅部地区の昆布漁に関する語彙に視点をおき、フィールド・ワークの成果を生かしており、民俗学とつながっていくような可能性にさらに期待したいと思う。

この号には本来ならば、丸山隆司本学名誉教授の「霧社蜂起事件」をめぐる言説<sup>（1）</sup>の（2）が入るはずだった。丸山先生は今年六月二十六日に病により永眠された。享年六十六歳。昨年三月に丸山先生の退官を記念した本誌九十号を刊行したばかりでその後一年少々の訃報に我々は茫然としている。今年三月の九十一・九十二合併号に上記の論文の（1）を寄稿され、「つづくと結びばれており、日本の植民地支配のただなかの台湾で一九三〇年に起きた「霧社蜂起事件」の「書かれ方・語られ方」をめぐって興味深い論考が展開され、深まってくはらずだった。遺稿などが残されていれば、今後可能なかぎり掲載したいと思うが、ひと

まず、この連載が途切れたことをご報告しなければならない。

この三月の日本語・日本文学科の卒業生に請われて丸山先生はつぎのようなメッセージを送られた。「solitude（連帯）」とは、solitude（孤独）、solide（固体、あるいは堅固な）という言葉と語源を共有する。しっかりとした個人があつてこそ、連帯も可能になる」といった内容だったと記憶する。社会に出ていく学生にこれ以上のきびしくそしてあたたかいはげまはらないと感銘をうけた。知識や情報のみではない、堅固な個人になる／つくる、とは教育のめざすべき最終のものとするれば、これは、我々教員にも託された言葉ではなかつたかと身の引き締まる思いがする。鋭利な問題意識による論文をたゆまず発信しつづけてこられた先生に改めて敬意を表するとともに謹んでご冥福をお祈り申しあげます。（種田）

二〇一五年十一月二十五日 印刷  
二〇一五年十一月三十日 発行

藤女子大学 国文学雑誌（第93号）

定価 五〇〇円 送料八〇円

振替 〇二七〇〇一四一六八〇七番

編集人 菅 本 康 之  
発行人

札幌市北区北六条西二丁目

発行所 藤女子大学日本語・日本文学科研究室内

藤女子大学日本語・日本文学会

印刷所 札幌市中央区北六条西十五丁目

㈱491アヴァン札幌